



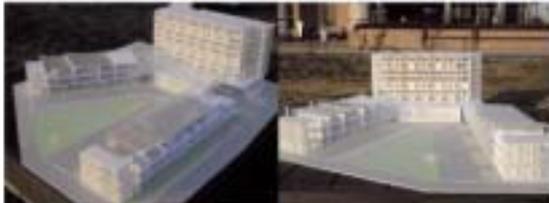
街の災害保険になる集合住宅の提案

曾根岡 拓路 (そねおか たくじ)
明海大学 不動産学部 不動産学科

市民賞

街の災害保険になる集合住宅の提案

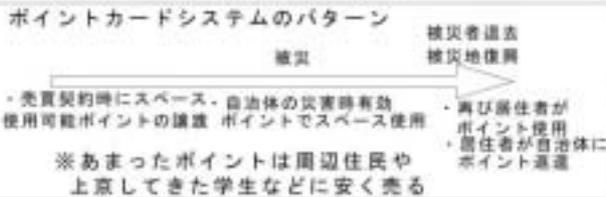
コンセプト



西から望む 南から全体を見る

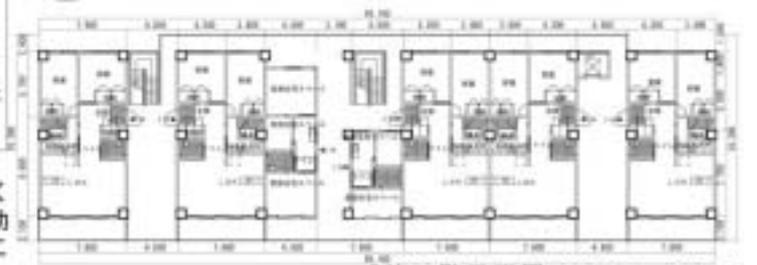
- ・計画地はJR稲毛駅から徒歩15分ほどの土地だ。この建物には災害時に仮設住居として使用可能なスペースがあり災害時までは集合住宅居住者がスペース使用可能だ。
- ・配置計画はA棟が敷地の環境を線路の騒音などから守り B、Cの低層棟でコミュニティスペースを囲む計画となっている。
- ・平面計画 はリビングを広く造りコミュニケーションの場を家の中でも大事にしてある。
- ・フリースペースの提供方法は主に3パターンある そのうち一つの例が下の図である。

正面：A棟棟棟
右：B棟棟
左：C棟棟



このプロジェクトをみることで、日々生きていく環境から身を守るための備えの重要性、人との助け合いの重要性について考えるきっかけとなることを願う。

日本は地震を含む自然災害が頻繁におこる国だ。被災者が家を失うような大規模な被害を出す地震も度々おこる。しかし、対策は充分とは言えない。私は今回、主に地震に対して被災前の対策、被災後の対応としての新たな選択肢を提案する。日々の生活では次の瞬間に何が起こるか分からない。今の日本は便利で快適な生活を手に入れることが可能な国となっていて自然環境の恐怖や自分とは遠い場所で起こった社会問題も直感するまでその本当の恐怖を知ることは難しいが、実は常に危険はすぐそばにある。この建物は「保険」という目に見えないものを空間として備えて地震を含む「災害」で住む場所を失ってしまった人たちの仮設住宅としての機能を備えている。そして仮設住居スペースは通常時は集合住宅の居住者が有効利用することが可能となっている。一時避難所などから仮設住宅への入居が例えば一週間以内であれば、またはその人数が増えれば避難生活が軌道にのるのが早くなる者が増えるはずだ。そして早ければ早いほど元の社会とのつながりへの影響も少なくする事ができると考えた。



日本は地震を含む大きな被害をだす自然災害がおこる国だ。

日々の生活では次の瞬間に何が起こるか分からない。この建物は被災時に仮設住居として提供可能なスペースを備えて「保険」を空間で造ってある。仮設住居スペースは被災時まで居住者専用スペースにプラスして使えるフリースペースとして有効利用され建物購入時の魅力や街の安心になる。

被災時は契約に従い速やかにスペース提供し、被災者の仮設住宅として数年使用される。

一時避難所などから仮設住宅への入居が速やかにできれば、またはその人数が増えれば避難生活終了も早くなるはずだ。

このプロジェクトをみることで、日々生きていく環境から身を守るための備え、人との助け合いの重要性について考えるきっかけとなることを願う。



講評

作品展の初日、千年に一度と形容される大規模な地震と津波が東日本を襲った。被災地での過酷な生活、避難所や仮設住宅での心身疲弊が積み重なる中、隣家同士の風呂の貸し借りや疎開先でのホームステイなど、市民の自然発生的な行動に心を取り戻す被災者も徐々に増えてきているという。作者はそういった共助関係の利点を察知し、集住計画に取り込んだ。いわば社会関係資本の資産化であり、これを平時に理解していたという点で実に優れている。また、ここに表現されたのは控え目な、遠慮がちな空間であるが、それがかえって好印象を与える。これらの住宅の所有者も、非常時の一時利用者も、日常的な落ち着きを得ることだろう。不動産を単なる私有財産としてしか捉えられない者に、本作の魅力は分かるまい。我が国の住宅供給の将来像を示した提案である。

(審査委員：矢野 裕之)